

## 「思い」による参加が、これからの未来を切り拓く！

かまだごう

～鎌田剛さん<東北公益文科大学 学長補佐 地域福祉コース准教授>



3回目の今回は、TOCHiTO のメインコンセプト「参加する暮らし」を提唱し、「庄内で暮らすを検討する会」でのコーディネートなどで移住検討者の方々の想いを丁寧に引き出し、活発な議論をリードしていただいている鎌田剛さんです。

### 1. TOCHiTO プロジェクトとの関わり～メインコンセプト「参加する暮らし」の誕生

—研究者を紹介するサイトにて、鎌田先生のページでは「研究・教育活動のかたわら、“伴走する地域づくり”を使命として位置づけ、地域ビジョン策定や移住支援等の各種プロジェクトにも携わる」と記載されています。TOCHiTO プロジェクトでも鎌田先生の真摯で積極的な関わりが大きな推進力になっていますが、「地域づくりは使命」と思うまでに至った背景は？

**鎌田先生** 全国の「地域力を結集して地域の課題の解決に取り組む事例」に数多く接したということが大きいですね。

順を追って説明します。2005年に東北公益文科大学に社会福祉士の養成担当教員として採用され、以来、教育者としては一貫して福祉人材育成に携わってきています。それと同時に、医療と地域社会との連携も研究してきました。例えば、歯科医と民生委員と弁当屋さんが高齢者の食支援について顔をつき合わせて話し合っていると聞けば、そこへ現地調査で伺い、始めたきっかけや連携上の秘訣等について聞き取るという作業です。2013年10月、本学が文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」（＝自治体と連携し、地域志向で課題解決に資する人材や情報・技術を集積、機能強化する）に採用された時、上記のような現地調査をやっていたことから事業の担当者に任命され、そこから本格的に各地の地域づくりの実践に触れることになりました。

生活クラブの伊藤さん（当時は共済連常務理事）とお会いしたのはちょうどこの頃です。酒田市の地域資源調査の一環で、千葉の「風の村」の池田理事長らと本学にこられました。

お話をうかがう過程で、生活クラブさんのFEC自給圏について共感でき、食を通じて産地と消費地がすでに密接につながっており、生活クラブさんが真ん中に入るといふ酒田市の移住政策にも強い関心を持ち、関わるようになりました。酒田市の五十嵐さんとは一緒に何回か東京にも伺い、現在入居予約をされている組合員さんの何人かとは、既にその頃から何度も顔を会わせています。

—TOCHiTO プロジェクトのメインコンセプトが「参加する暮らし」ですが、こういった経緯で生み出されたのでしょうか？

**鎌田先生** 「地（知）の拠点整備事業」の担当者として全国を視察する中で、元気な地域は、住民が使命感や情熱といった「思い」を持ち、自らすすんで地域の活動に参加していることが分かってきました。

一方、元気がない地域では「思い」が希薄な感じを受けました。活動はしているのですが、年1回の花壇整理とかごみ拾い程度で、「思い」ではなく、義務や責任として参加している様子がみてとれました。そこに「思い」がなければ、現状維持はできても、未来にはつながらないですね。

その頃、TOCHiTO プロジェクトでも、生活クラブの伊藤さん（当時は生活クラブ連合会会長、現顧問）、小泉さん、酒田市の五十嵐さんらとも、各地の先進事例の視察にいきました。一緒に同じものを見て、そして行き来する道中や時にはお酒を飲みながら話を重ね、次第にイメージが固まっていきました。やっぱり（義務・責任ではない）思いによる「参加する暮らし」だよな、と。



生活クラブの伊藤さん（写真右端）ら TOCHiTO プロジェクトのメンバーと各地の先進事例を視察した。

そしてちょうど、こうしたイメージが TOCHiTO の関係者の中で固まり始めた 2018 年の時に、鶴岡市の小堅地区でフィールドを持つようになったのです。

## 2. 小堅地区での挑戦～対話の中で「思い」を共有

——その小堅地区（鶴岡市街地から南西に約 20Km の日本海沿いの地域）での取り組みというのが、①「シェアハウス&キッチンこがたん。」を創る（一緒に取り組める体験をつくる）、②地域ビジョン「コガタノスガタ 2030」の策定（シェアハウスづくりの経験をもとに将来計画をつくる）、③多世代あそび場「小堅ランド」開設（2030 年に向けた取組みを始める）、という事ですが、たった 4 年で③まで実現しました。まずなぜ小堅地区だったのでしょうか？

**鎌田先生** スタートのシェアハウスは実は私の持ち物なんです。2006 年に空き家物件として売り出されたものを購入しました。私は釣りが趣味で、すぐ目の前が日本海という物件を釣りの拠点として購入したというのが真相です(笑)。

当初は、大学のゼミ活動でも使えるかなと思いましたが日常使いをするには少し遠い。私が住んでいる鶴岡市内からも車で 30 分ということもあり、月 1 回掃除に来るぐらいになっていました。なんとかしないと、と思っている時に、小堅地区の若者と出会って、「(地域のために) この家の利活用を考えませんか」と飲み会を持ち、一緒に検討し始めたのが出発点となりました。

小堅地区を知るにつれ、住民同士の交流・対話の機会が少ないこと、さらに、その結果でもありますが、住民みんなで一緒に何かに取り組む活動経験も、他地区と比べ少し不足しているだろうなといった課題がみえてきました。実は、隣接する三瀬地区は環境省の「地域循環共生圏づくりプラットフォーム事業」に採択され、その隣の由良地区では、浜のおかあさんたちが市場に出ない未利用魚を使った商品開発などにずっと以前から取り組んでいます。では小堅地区はというと当時は目立った活動が見あたりませんでした。

——とすると、「地域づくり」を小堅地区で展開するのは大変と思われたのではないですか？

**鎌田先生** もちろん苦労はするだろうとは思いました。というか、シェアハウスづくりのような新しいことをやろうとするわけだから、苦労をつくり出していく自信は間違いなくあった(笑)。けれど、皆には初めから「絶対失敗しない」と言っていました。なぜなら、「良い苦労」になるとの確信があったから。みんなで一緒に地域の未来に向け汗をかか「良い苦労」が生まれるなら、失敗なんてするはずがない。苦労を取り戻すことができただけで大成功です。

シェアハウス・ビジョン・多世代あそび場、と段階をおって進めてきたわけですが、例えばシェアハウスをつくるということは、入居者募集や日常運営の苦労を継続的に行うということです。でも 1 人でも地区の暮らしを楽しんでくれる人が入居してくれると、ご近所から歓迎ムードの輪が地区全体に広がり、自分たちも楽しい。となるとシェアハウスの運営自体が「楽しい苦労」になるわけです。(シェアハウスは鎌田先生から地区の自治振興会へ無償貸与。自治振興会が家賃収入から維持費を賄う仕組みになっている。補修や設備に費用がかかる場合は、住民から集めた自治振興会予算からも支出するので、結果として、住民全員が間接的にシェアハウスを支える構図となっている。)

あそび場づくりもそう。初めから見守り役のボランティアが集まらないのは当たり前。けれど実際に子どもたちの笑顔に接したら、こんなに素敵なボランティアならもっとまわりに広めようと、進んで仲間を集めの苦労をしたくなる。

私が小堅地区に関わるようになってから、この地区のコミュニティセンター職員の作業量はおそらく倍くらいにはなったのではないかと思います。けれど、すごく生き生きと仕事をされているようにみえます。あ



シェアハウスから望む日本海！これが日常風景とはなんと贅沢な…。(撮影：地区アマチュア写真家の佐藤勝彦氏)



シェアハウスづくりに若者たち、子どもたち、皆が関わった。造作の一部を自ら作った記憶、頑張ってベンチを塗った経験、その一つひとつがシェアハウスの財産となっていく。



そび場で「今日は子どもたちがこんな風楽しんでいました！」と、とても嬉しそうに写真を送ってくれます。まさに、義務・責任ではない、「思い」による参加ではないかと思えます。

——各ステージで、話し合いやワークショップ、アンケートや報告会などを何度も積み重ねられ、合意形成に至る道筋を非常に丁寧にやられたようですが。

**鎌田先生** 地域づくりといっても、私は町全体のデザイン・建築設計などの専門的知識をもっているわけではありません。私ができることは、「丁寧に考えることの手伝い」だけなのです。あくまでも主役は小堅地区の住民です。冒頭、「伴走する地域づくり」と紹介いただきましたが、逆に言えば伴走しかできないのです。ただ、その伴走にあたっては、私の得意とする、何かを創り出すための方向づけ、場づくり、コンセプトづくり等を可能な限り、丁寧にやろうと思っています。

例えば、シェアハウスづくりでも何度も地区の若者メンバーと話し合いました。初めは、「そうだゲストハウスをやろう」とか威勢のいい話がでてくるんですけど、ここでその場のノリで進めてはダメだと自身にも言い聞かせ、慎重に進めました。さらに話し合いを行っていくと、そのうち「ほんとにやりきれるかな」、「仕事と子どものスポ少送迎でけっこう忙しいんだ」とような本音が出てくる。そこがとても大事で、そこから本気の「思い」による参加が始まると思っています。

実はこのタイミングで、私のほうから「ゲストハウスでなく、シェアハウスにしませんか？」と提案しました。両ハウスは、ソトから来る人と交流できる点では同じですが、日々の運営の面では、シェアハウスのほうが圧倒的に負担は少ない。効果を考慮しつつ、メンバーの自信が足りない部分と不安に伴走するための提案でした。



「コガタが好き」だから  
「ここで生まれ育ち、思い出がたくさんある」から  
あるいは、シェアハウスに住んでみて、  
「人があったかく、毎日が楽しい」から  
などの思いが参加の理由になれば、地域への関わりが  
「自分ゴト」になります。

『コガタノスガタ 2030』編集後記より～鎌田先生記

運よく補助金もいただき、実際に走り出してみると、仕事に家事育児に大変だけど、なんとかやりくりして、自分たちの手でシェアハウスを作り上げることができました。これが地区の若者グループにとっては、大きな自信につながったものと思います。俺達にもできる、と。すると、市街地のほうに新居を計画していたメンバーの一人がそれを取りやめ、地元に残ることを決意して、小堅にある家の建て替えをしたのです。これはホント嬉しかったですね。彼は今、いろんな活動を中心になってやっています。そしてその親の後ろ姿を小学生の子どもが見ている。彼らが成人

する頃、地区は大きく変わると思います。

ビジョン策定でも、ソトの若者（シェアハウスの入居者や公益の大学生）も入れたのべ15回の住民ワークショップやアンケートを実施し、住民各世代の意見を丁寧に吸い

上げ、綿密な議論を重ねました。その結果、2030年の将来像が「子ども・子育て世代が住みたくなる小堅地区」に決まり、具体的なプロジェクトを、4領域9活動に整理することができました。

この策定過程を通じ、シェアハウスづくりの時よりも「思い」による参加が増え、それが次のあそび場づくりプロジェクトへ接続されました。今ではシェアハウスの元入居者が音頭をとってイベントを企画していますし、住民の中でも、最初は様子をうかがう感じで参加していた方や新規メンバーが、あそび場づくりの実行委員会ではリーダーのようにふるまっている様子を見て、「思い」って増えていくんだなと実感しています。ヒト・モノ・カネといった地域資源は減る一方ですが、思いは増えていく。

### 3. 皆の気持ちを代弁したのがメインコンセプト～連携は冒険から始まる！

——TOCHiTOのメインコンセプト「参加する暮らし」の中でも、「時代は、義務・責任を超える新しい参

加のカタチを求めています。それが『思い』による参加です。英語にするならば、mission, desire, or hope あたりが適当でしょうか。これらは義務・責任と違い、“自分ゴト”としての参加を導きます」と明確にされています。

**鎌田先生** 先ほど「参加する暮らし」のコンセプトは、TOCHiTO 関係者で先進事例と一緒に視察し、話し合う中でまとまっていたものと申しましたが、さらにいえば、TOCHiTO の入居者や関係する人たちが元々思っていたことを代弁し、形にしたものなのかもしれません。生活クラブさんの会合には、もう何年も連続で参加してきました。意識の高い組合員の方々と関わるなかで、生きかた・暮らしかたに、皆さんほんとに明確な「思い」を持っていらっしゃるなど、常々感じてきました。それを言葉にすれば、「参加」になるのかなと。

これから TOCHiTO に入居される皆さん同士、そして COTO のオフィスに入る方々や関わる人たちで、自分ができること、やりたいこと、などの自分らしさ溢れる「思い」をまず持ち寄り、そこから、自分が、地域が、未来が元気になる参加のカタチを考えてみてはどうでしょうか。最初は目立たないような、小さなコトからでいいと思います。「思い」を持って始めれば、その輪が自然に広がっていくものと思います。

——いよいよ来年の3月から TOCHiTO への入居となり、新たな人間関係づくりが始まります。この人間関係づくりに関しては、ネット上にて、福祉関係の職員・関係者を対象にしたご講演の中で「信頼は冒険だ」とお話しされているのを拝見しました。

**鎌田先生** 講演の中でも触れましたがそれはニクラス・ルーマンの言葉です。これと山岸俊男先生の『信頼の構造』をベースに、私なりに、信頼をどう育み、成熟した連携をどうつくり上げていくかについてまとめてみました。TOCHiTO にひきつけて言えば、例えば地域の人と一緒に連携しながら何事か成し遂げたいという場合、何らかの事がらを相手に期待し“あてにする”こととなります。これが「信頼」ですが、期待する“あて”が外れる場合もあります。だから「信頼は冒険」なのです。成熟した連携をつくるには、①相手の人となりや行動傾向・自分への感情を少し知る、②それを手掛かりに相手に期待を向け“あて”にする、③その期待を少しずつ膨らませ（リスクを増大させ）その結果を確認しながら協力し合える関係を一步步創っていく、ことです。

（TOCHiTO がある）千石町の方々との関わりも恐る恐るだと思うんです。これは地元の人から見ても同じです。時には「東京（都会）の意識を持ち込んで」と思われる部分もあるかもしれません。

でもそこで臆することなく、まずは自分から一歩踏み出し、この人なら、と思う人に何か訊いたり小さなことを頼んだりすることから始めてみてはどうでしょうか。連携はいつも冒険から始まる、のです。そして互いの「思い」をすり合わせ、増やしていく。

最後に、繰り返しになりますが、あらゆるものが縮んでいく今の社会状況の中で、「思い」は自分たちの手だけで大きく育てることのできる唯一の資源です。義務・責任ではない、「思い」による参加で、ときに苦勞をしながらも、一緒に未来を切り拓いていきましょう。

#### <取材を終えて>

・「シェアハウス&キッチンこがたん。」に伺ったの取材でした。場の力というのは確かにあり、造作の随所に携わった方々の「こがたん。」への、それこそ「思い」が感じられ、その中でお聞きした小堅地区での取り組み内容は、頭だけでなく体全体でまるっと理解できたような気がします。

鎌田先生は秋田市のご出身で、小さい頃は「いつも自然林などに友達と入り込み、遊びは自分で作り出していましたね」。そしてそれが「構想力・想像力・イメージーション力を育んだのかもしれない」と微笑み、今でもアイデアを出すこと、構想することが大好きだとおっしゃいます。

お連れ合いと中2（女子）・小5（男子）・小2（女子）の5人家族で、休日にはアウトドアなどにも出かけるが、「空き家バンク」のチェックは怠らない。「この間取り、ローケーションであればこういう新たな事業ができる」との考えが広がり、すぐにでも実現に移せそうな具体案もすでに複数お持ちとのこと。「伴走する地域づくり」、その秘めたるエネルギーは無尽蔵です。(S)